『國民新報』1940年4月28日

心を治めよ[[1]](#footnote-1)

　はの にいて一のをなさいましたが、そのは、のためには、としてののを[[2]](#footnote-2)せねばならない。それにはにけるもさることながら、のがであり、しかもそれはのをするに うてなされねばならぬとされました。それらののにをするに、づをめねばならぬとされたがあります。

　とひ、とひ、とひ、とひ、いづれもをするからするものでありまして、このがめられてゐないから、とか、とか、とかいふ、さまざまのはしいことが るのであります。そればかりでなく、のめられてゐないは、して、としてもとしてもとしても、もしく、につになることはないのでありますし、またの一もみじめなものに ありませぬ。

　しからばをめるためにはどうすればいゝか。一ににいて、をみそなはすのであります。これはなるでは なくして、たるでありまして、のをじつじないものに はないのであります。かういふをもつてゐて、二六くくをくものは、おのづからとからとをして萬の信とを、なすことすべてがえるのであります。でないは、よしんば一はうまく くやうでもしてきはしませぬ。

　二には、にされたまふ、といふであります。きかれ小さかれわれわれは、からかをしかつてゐるので あります。われわれがのつとめをするとしないとは、ちにのにき、それが はに、われわれとのとなつて つてるものであります。一[[3]](#footnote-3)、しくればわれわれののもももすべて、からかつたものであります。もしこれをせずに、これがすべて のものであるとへるものがあるとすれば、それは につたで、でなければ であります[[4]](#footnote-4)。でありますから、でな　のといふをもさぬといふことがわれわれのであります。かういふさへあれば、や、や、の一一も わがのものとして、また われわれのや、われわれをものものとして にし、さないやうにすることでありませう。

　！はののみであり、ののであります。した二つのをしかとして、すとも これをさずにをめてさい。そしてのにするとにをあらせてさい。

1. この文章は一部「わかちがき」がなされている。 [↑](#footnote-ref-1)
2. 単行本『同胞に寄す』では「完成」が「完遂」に変わっている。 [↑](#footnote-ref-2)
3. 単行本『同胞に寄す』では「一體」が「そもそも」に変わっている。 [↑](#footnote-ref-3)
4. 愚癡は仏教の用語で愚痴とも書く。事物の理に暗い心をさし、煩悩の源とされる。我癡あるいは無明ともいう。なお、この部分は単行本では「愚癡といふものであります」に変わっている。 [↑](#footnote-ref-4)